

吉田 幸二
kouji yosida

今年9月、南アルプスの仙丈ヶ岳・甲斐駒ヶ岳に行ってきました。以前はよく山に行っていましたが、体力の衰えに加え一緒に往復してくれる同年代の仲間が減ったことで、最近は本格的な山行はほとんどできなくなってしまいました。というわけで今回も北沢峰にテントを張って空身で往復するというお手軽な山行になりました。全員で7名という参加者の日程の調整がつかず、うちは金土日、残りの5人は土日月の日程になってしまい、全員が揃う土曜日の晩に大宴会をやろうという予定をたてました。9月20日前後のこの時期は、キノコがたくさん取れるのではないか?との期待を抱かせ、土曜の晩はキノコづくしで盛り上がりながらなければいけないはずでした。北沢峰のキャンプ場は峰のバス停から徒歩約10分で到着するので、なんでも持参できるという山の中とはとても思えないお手軽なキャンプ場なのです。そのため、土曜の晩はテントが指定地を埋め尽くす混雑ぶりで、山小屋も予約者以外は宿泊お断りと言う看板が立っている始末です。

大宴会当日は仙丈ヶ岳を往復して来たのですが、今晚の宴会用にとキノコを探しながらのキノコモードで歩きました。標高2000mから3000mを往復したことになるのですが、樹木限界は約2700~2800mで、標高の低いほうから、カラマツもちょっとだけあるコメツガやシラビソの針葉樹林、標高が上がるにつれてダケカンバなどが混ざってきて、ナナカマドなどの矮小灌木が多くなり、這い松地帯に遷移していくと言った植生の変化がみられました。

肝腎のキノコはというと、キャンプ場近くのカラマツにはお決まりのハナイグチがちらほらと見られ、そのそばには赤モミタケも2~3コ生えてはいます。これらは、帰りに取ればいいやと思いつつ、先を急ぎました。きれいな林床の森がつづき、本日の大収穫が強く予感されるのですが、なかなかキノコはありません。たまにあっても本日の主旨にあわないキノコなんです。理念的には人間同様、キノコにも貴賤はありません。しかし、差別してはいけないとおもいつつも、凡人は無意識の

うちにそれをしてしまうのです。登って行くと、ダケカンバの倒木にムキタケがけっこう生えているではありませんか。うれしくなって、普段よりもいやしく採取していると(7名分を確保しなければいけないと言う思いがそうさせるのですが、じつは普段もかなりいやらしいかもしれません)、それを詰(なじ)るような揶揄するような、そういう類の発言があり、一面の青空の元に、私の心は萎えていくのでした。

登るに従い樹高が下がり、疎林となり、すがすがしい秋空のもとに鳳凰三山、北岳や富士山が、振り返ると昨日登った甲斐駒ヶ岳や鋸岳が、さらにその奥には八ヶ岳が、いつもと変わらぬつかしい姿で出迎えてくれます。ハイマツが現われ、疎林となり直射日光にさらされはじめると次第に暑くなり、キノコモードから山歩きモードへのシフトをかねて眺望に恵まれた場所で休憩を取りました。モードを山歩きに変えても、ピッチは昔ほど上がりません。いやが上にも年齢を実感させてくれるので、多少雲が湧いてきた程度で、山頂からの眺望は良好で久しぶりに風景などを写真に納めました。

登りとは別ルートの下山コースを快適に下ると、這い松地帯からダケカンバの純林へと変化し、すでにダケカンバはほとんど落葉し、初冬のたたずまいをみせています。帰路は行きよりももっとキノコの姿は少なく、北沢峰近くで、スギヒラタケやサクラシメジが多少取れ、行きに見ていたハナイグチやアカモミタケを採取して、この日の山行は終了した。しかし、本日収穫したキノコの総量はいかにも少なくとも7名分はありません。大宴会を執り行うべく、昨日歩いた仙水峠のほうに再度キノコ探しに出発しました。昨日チャナメツムタケを取った場所で残りのキノコを採取したあと、アサヨ嶺に直登するコースを登るとすごくきれいな林床の針葉樹林帯ありました。そこでかなりまじめにキノコを捜索しましたが、その甲斐むなしくほぼ手ぶらで6名の待つキャンプ場へと引き返したのです。